

『抒情詩』 — その時代性

神 立 春 樹

- 1 はじめに
- 2 『抒情詩』の位置づけ
- 3 作品と作者の評価
- 4 『抒情詩』の解釈と鑑賞
- 5 作品の分析
- 6 『抒情詩』の時代性

1 はじめに

本稿は、宮崎湖処子編『抒情詩』についての一検討を行ない、そこにみられる時代性を摘出し、本詩集の時代的特質を明らかにするものである。筆者は、日本における産業革命＝産業資本の確立を研究の対象としているが、小論は、その時期である明治という時代の時代像を描くという課題の一環に位置する。これまでに、この時期に著された文学作品における、明治の農村、農民生活の描写を検討し、これを通じて時代把握を深めることを意図してきた⁽¹⁾。また、ただに農村という地域にとどまらずに、より広くこの時代の特質を把握するという観点から尾崎紅葉『金色夜叉』、徳富蘆花『不如帰』をとり

(1) 拙稿「蘆花徳富健次郎『みづのたはこと』における東京近郊農村」『岡山大学経済学会雑誌』第17巻第3・4号 1986年、「島崎藤村『千曲川のスケッチ』における佐久の村々」同前誌 第18巻第1号 1986年、「田山花袋『田舎教師』における北埼玉地方の農村」同前誌 第19巻第1号 1987年、「森田文蔵（思軒）の描写した松方デフレ期の岡山の農村」同前誌 第20巻第2号 1988年。

あげて考察してきた。⁽²⁾ここでは宮崎湖処子編『抒情詩』をとりあげる。

まず、この詩集であるが、簡単な紹介をあげれば、「詞華集 『抒情詩』宮崎八百吉（湖処子）編 全一冊。明治三〇年（一八九七）年四月 民友社刊。国木田独歩『独歩吟』（二二編）、松岡国男『野辺のゆきゝ』（二三編）、田山花袋『わが影』（四一編）、太田玉茗『花ふゞき』（二八編）、嵯峨の山人『いつ真て草』（九編）、宮崎湖処子『水のおとづれ』（二六編）など長短一四九編の創作詩を収め、おのおのの詩人の作品群にそれぞれの自序が冠せられている。所収作品の中には、すでに『文学界』やその分身たる『うらわか草』に発表されたものもある⁽³⁾、ということになる。

これは作家として大成した国木田独歩、田山花袋や、民俗学をうちたてた松岡（柳田）国男などの、一般にはおよそ詩歌とは縁遠いと思われる人々の作品による合同詩集なのである。そして、4ヵ月後の同年10月に出版された島崎藤村の『若菜集』の前に、たちまち評判が潰えていったものである。

2 『抒情詩』の位置づけ

つぎに、この詩集は文学史上にどのような位置づけを与えられているかをみよう。

この点について、矢野峰人は、「この時までには公にされたアンソロジーには、上来述べたやうに、明治十五年の『新体詩抄』をはじめとして、『新体詩歌』（明治十五・十六年）『新体詞選』（同十九年）『於母影』（同二十二年）『新体詩歌集』（同二十八年）『花紅葉』（同二十九年）等がある。その中、『新体詩抄』に

(2) 拙稿「尾崎紅葉『金色夜叉』—その時代描写」『岡山大学経済学会雑誌』第21巻第1号 1989年、「徳富蘆花『不如帰』における時代描写」同前誌 第23巻第1号 1991年。
 (3) 石丸久「抒情詩」吉田精一編『日本文学鑑賞辞典 近代編』1960年 東京堂。

は、二三の創作詩が収められてはゐるが、後の『於母影』と同様、むしろ訳詩集として見るべきもの、また『花紅葉』は、この時迄に現れた創作詩としては最もすぐれた多くの作品を収めてゐるにもかかはらず、『美文韻文』と銘を打つてあるやうに、純粋な詩集ではない。また、『新体詩歌』は『新体詩抄』の上に、平野次郎国臣の月照の入水を悼む詩とか『太平記』の『俊基朝臣東下り』の一節とか、藤田東湖の作品とか、時代的にも差別無く、唯、韻文乃至韻文として読めるものを加へるなど、新時代の詩に対する自覚的態度を以て編まれた詞華集ではない。また、『新体詩歌集』に作品を寄せてゐる人々の多くは一といふよりもすべては一いはゆる『学者』ではあるが『文学者』ではないため、たとひ形は整つてゐるものでも、文学性に乏しいものが多い。斯う考へて来ると、『抒情詩』は、この時迄に出版されたアンソロジーとして、最も純粋な、その表題にふさわしい最初の詩集であると言つても過りではない⁽⁴⁾、「一般に『民友社派の詩集』の名で呼ばれてゐる此の一卷が出た時、これは詩集ではなくて、韻文に対する意見を集めたものであると、『帝國文学』記者が批評したのは、上来瞥見したやうに、其処に諸家の詩歌観やその実験が、あまりに堂々と顯著に示されてゐたためであろう。それ程、この一派の詩は、『大学派』とか『擬古派』とか呼ばれる一群の詩人の作品とは、その取材・表現、両方面に於て、遥に自由・清新なものであつた。河井醉者が、その『新体詩作法』(明治四十一年博文館刊)の中で、本集を評して、『微かながらも此の期の詩壇に、一の清涼剤を投じたもの』と言つてゐるのは、『抒情詩』が我が近代詩史上に占める位置又は意義を見事に要約せるものと言つてよからう。要するに、意余りて辞足らはず、芸術品として未完成の域を出ないが、本書が新境地を開拓した功績には、真に没すべからざるものがある⁽⁵⁾』と述べている。

(4) 矢野峰人「創始期の新体詩—『新体詩抄』より『抒情詩』まで—」『明治文学全集 60 明治詩人集(一)』1972年 筑摩書房 387~388ページ。

また日夏耽之助は、「此詩集は、『早稲田文学』の天来に『小兒的』の一喝を啖ひ、『帝国文学』記者に、これは詩集ではなくて韻文に対する意見だなどと酷評を蒙つたが、すべてこの詩集の作者が、真率の感情を飾らず匿さず偽らず偽らず露骨に表白してゐる一事は、後年かへつて値以上に高くみられた原因であつた」⁽⁶⁾、「畢竟、詩集『抒情詩』は擬古派の詩謡ひとり栄えたこの頃に、生硬の咎め、稚拙のそしりは免れないが、擬古派には全く見られない新果実の芳醇を放つ詩薈を以て、詩壇の一勢力を形したもので、史的重要は少いが藤村が第一集の出るまでの時期に介在しての独立意義は失はれぬ。この少詩人らが、後年の活動記録に顧みてもまた特殊興味はある」⁽⁷⁾と評している。

さらに小川和吉は、『抒情詩』について、「抒情詩一常用漢字では叙情詩と書きますが、これはギリシア古典の叙事詩、叙情詩、劇詩の三大形式の一つリリックの日本語訳で、新体詩人宮崎湖処子が、当時の新進詩人の国木田独歩らの自選詩稿を集め、「宮崎自身のそれをも加えた合同詩集に冠した書名によって、はじめて用いられた言葉でした。そういう意味で、『抒情詩』は文学史的にも注目しなければならない明治の詩集でした。宮崎湖処子によってリリックが抒情詩と命名された時から、新体詩は開化の西洋詩の模倣から脱皮して、日本の近代文学の中で独自の発展を遂げることになります。したがって、詩史の上ではこの詩集刊後を起点にして、近代詩という呼ばれ方に変わります。そして同時に、この一冊によってその後の近代詩の性格が叙情詩を主流として、現代詩に至るのでした。合同詩集『抒情詩』は、そういう意味で明治の思想家徳富蘇峰の民友社から刊行された画期的な詩集だったのです」⁽⁸⁾と、詩史上の位置づけをしている。

(5) 矢野偉人「創始期の新体詩—『新体詩抄』より『抒情詩』まで—」前掲書 391～392ページ。

(6) 日夏耽之助『改訂増補 明治大正詩史』1948年初版 1971年版 東京創元社 231ページ。

(7) 日夏耽之助『改訂増補 明治大正詩史』前掲書 232ページ。

以上のように日本詩歌史上において、この詩集は、稚拙で未完成ではあるが、感情を率直に吐露した新鮮な詩集として位置づけられているのである。

そのような位置づけが与えられ、評価されているが、しかし、その声名は同じ年の10月に刊行された島崎藤村の『若菜集』によってたちまち潰えてしまう。「この詩集は柳田によれば千部刷ったというが、四月後に出た島崎藤村の『若菜集』の声名に蔽われて、刊行された時点ではさしたる反響を得ずして終った⁽⁹⁾」という。

このように短期間にその声名が潰えてしまったのは、「『若菜集』のもつはげしい情熱、個性的な官能美、艶麗な措辞、新奇の構想何れをも『抒情詩』は欠けていたからである⁽¹⁰⁾」。そもそもこの詩集については、「この詩集は、その内容よりも、むしろこれに参加した顔触れの方が、今日から見ると興味をそそる、「『抒情詩』に集った詩人たちは矢崎と宮崎をのぞいてはみな二十台の青年であり、彼等の辿つた様々の道は、詩が彼等の青春（あるいは生涯）にとつて、いわば偶然の事件であつたことを示しています。すでに既成の大家であつた矢崎、宮崎の二人を除けば、柳田国男はもとより、花袋独歩の詩からも、彼等の後期の仕事は予測できません⁽¹¹⁾」、「このアントロジイは詩史の上では存在理由が薄く、書誌的稀本として久しく著目せられてゐた。その作者らも終りを詩人として全うした者は一人もなく、独歩花袋はその小説家の前歴として、矢崎は作者及び訳者として、玉茗は作者及び少年物作者として、湖処子はコンフェッション物の著者として、松岡は柳田姓を冒して民族学の偉れた集大成者としての各の後歴に徴して興味を繋けられた⁽¹²⁾」というものである。

(8) 小川和佑「抒情詩」『日本文芸鑑賞辞典』第2巻 1987年 ぎょうせい 222ページ。

(9) 吉田精一「解説」『田山花袋全集 新輯別巻』1974年 文泉堂 769ページ。

(10) 吉田精一「解説」『田山花袋全集 新輯別巻』前掲書 769ページ。

(11) 中村光夫「明治」『現代日本文学史』1969年 筑摩書房 97～98ページ。

(12) 日夏耽之助「解説」『日本現代詩大系 第二巻』1948年 河出書房 497ページ。

3 作品と作者の評価

それではの短期間ではあるが評判をよんだこの詩集の作品と作者についての評論・評価を聞こう。

(1) 国木田独歩

国木田独歩は、「独歩吟」22編の詩をよせている。長文の序と「驚異」「夏の夜」「浜づたひ」「枯野の友」「友なき里」「春来り冬ゆく」「門辺の児供」「君ゆゑに」「恋のきはみ」「森に入る」「聞くや恋人」「今こそは」「『こそこの今』」「山林に自由存す」「独坐」「秋の月影」「山中」「沖の小島」「故郷の翁に与ふ」「恋の清水」「風の音」「山の声」からなる。

この独歩の詩について、矢野峰人は、「詩人としての独歩をあまりに高く評価する事は、史観を弁へない者の過褒と言はざるを得ない。彼の詩には、自ら告白せる如く、壮士が肩を怒らして漢詩を朗吟せる姿を想はせるものが多い」、しかし、「而も、彼が、独自の詩歌観を有し、それが単に時代に先んじたものであつたといふだけに止らず、よく古今に通じて謬らない卓見であつた事は、まことに驚嘆尊敬に値すると言つてよい。即ち、彼は、『独歩吟』に附した自序に於て、次のやうに述べてゐる」としてその自序を引用し、「これは明治三十年二月に執筆されたものであるが、独歩は新体詩の国民生活に及ぼす影響を考へ、その将来性を信じ、これが日本の詩体なるべき事を確信してゐたのである」、「故に、その作品は、よし拙くとも、ここに今や明確なる自覚を以て創作された詩—新体詩が現はれるに至つた⁽¹³⁾と言へる」と、その意義を述べている。

日夏耽之助は、「独歩の作は生一本な幼稚な単純な感情を率直に無雑作に

(13) 矢野峰人「創始期の新体詩—『新体詩抄』より『抒情詩』まで—」前掲書 389ページ。

快活に粗淡に表はしてゐる。この特色は其一生を通じてかれの芸術から離れない。余りの稚醇に微笑して読みかけてゐて、卒然とその自然な頓悟を抒へる時、忽ちその詩情に魅せられたる。それが独歩の詩である」と述べ、さらに、「独歩吟」のなかの「山林に自由存す」を引用しつつ、「生硬の句陳套の造語に些の懸念もおかず一気に簡単に歌ひ了つて細部の破綻にも志を止めない彼の詩はつねに拙劣な造句にみちみちてゐる。しかもその拙い句計りの間で時として独自の卓れた一節をも作ることがあるのが彼である。その時それらの拙句等はひとしなみにその独自の力ある個性に燦然とばかりにかぶやく事もある。それが独歩の詩である⁽¹⁴⁾」と評している。

(2) 松岡国男

松岡国男は「野辺のゆき」^ムという、序と31編の詩を寄せている。「夕ぐれに眠のさめし時」「年へし故郷」「野末の雲」「ある時」「〔無題〕」「海の辺ゆきて」「友なし千鳥」「磯間の宿」「人に別るとて」「思ひ出で」^ム」「鶯がうたひし」「美しき姫に若者がいひし」「花陰の歌」「都の塵」「園の清水」「〔無題〕」「月の夜」「〔無題〕」「〔無題〕」「母なき君」「〔無題〕」「夕のみちに」「野の家」「小百合の花」「一夜」「〔無題〕」「ある折に」「暁やみ」「はかなきわかれ」「〔無題〕」である。

この松岡国男の詩については、矢野峰人は、「独歩、湖処子等と共に、その作品を『抒情詩』に掲げてゐる人の中で、特に傑出せる作家を選ぶならば、私は何等躊躇する所無く松岡国男（……）を挙げたい。……よしその想は浅く取材の範囲は狭くとも、純粹なる感情、処女の如くつつましく爽かなる歌ひぶりに至つては、正に藤村以上と評すべく」である、……「詩人としての彼が俄に世人の注目する所となつたのは、前者〔『抒情詩』引用者表記〕に於ては『野辺のゆき」^ム、後者〔『山高水長』引用者表記〕に於ては『野辺の小草』な

(14) 日夏耽之助『改訂増補 明治大正詩史』前掲書 225～226ページ。

る題下に収められた一群の詩によつてであるが、その大部分が上述の如く『文学界』にはじめて発表されたものである事を知るならば、彼こそは藤村と共に、この一派を代表する詩人と称しても差支あるまい。『野辺のゆき』には、他の共著者と同様に小序が附されてゐる。然し、国男の小序は、他の独歩や湖処子、玉茗、花袋等がいつれも独自の詩歌観を披瀝し気焰万丈の観があるのに反し、処女の如くつつましくまた卑下した態度で書かれてゐる。而も彼は、『されどいかにせん、此は我が歌なり、よし此姿此言葉つかひ、世のさだめに違ふこと多くとも、猶これわが思を舒べたる、我が歌なるをや、』と毅然たる態度を以て自信の程をも示してゐるのである。この謙虚な態度と毅然たる態度とは、自ら彼独特の詩風を形作つた。即ち、前者は清純の感情を溢るるばかりに湛へた新声を生み、後者はその格調をしてまぎれもなき彼独自の高雅なものたらしめたのである。彼の作品が独歩や湖処子等のそれを抜いて断然光つてゐる事は言ふ迄も無いが、そのすぐれたものに至つては、たしかに先輩詩人藤村をもよく凌いでゐると評しても過言ではあるまい⁽¹⁵⁾、と評している。

日夏耽之助は、「松岡国男は情繊く柔かにしかも狂気に逸せず、静謐な理智の円座に端坐して、流麗な少年の感情を稚醇の律語に盛る。『野辺のゆき』の頁の中、君がかど辺をさまよふは／ちまたの塵を吹きたつる／嵐のみとやおぼすらむ、／其あらしよりいやあれに／その塵よりも乱れたる／恋のかばねを暁の／やみは深くもつゝめるを、『暁やみ』の一説であるが、その感情の特徴は君が園生の花うばら／ちりて乱れていつとなく／みやこの塵にまじるなり（『都の塵』第一聯）といつた所にあつた。稚さは独歩に近いが、控目に表現するので、泡鳴のごときは、その消極風可憐美を賞して『抒情詩』第一人と称した。一夜 空てりわたる月かげは／小窓に見えて

(15) 矢野峰人「創始期の新体詩—『新体詩抄』より『抒情詩』まで—」前掲書 390～391ページ。

隠れけり、／とてもかなはぬ願ゆゑ／我は泣くなり夜もすがら 此の真情の美しさは真実の純情の美であつた。よしんば後年の努力が詩の上に行はれたとしても彼は到底大規模の詩人ではない。が、只万人に愛せられる性質の詩人にはなり得たろう⁽¹⁶⁾』としている。

(3) 田山花袋

花袋は「わが影」という、長文の序と41編の詩を寄せている。「山かげ」「春の夜」「ある夜」「妹の君」「君が姿」「やみの夜」「君をこひしは」「雨の夜」「眺望」「朧月夜」「君と我」「まごゝろ」「野遊」「あるとき」「わが心」「涙」「あら磯」「月の夜」「なでしこ」「松原」「孤岩」「あら波」「よき日」「影」「ゆふ月」「君が名」「琴の音」「わが住む里」「孤灯」「旅にありける夜」「わが世」「雲のみだれ」「林の奥」「夕月夜」「友と別るゝとて」「昔の友」「なき人をおもふ」「同」「ともし火」「ゆめ」「をぐらき墓」である。

この花袋の詩は、「花袋は、後にこそ『蒲団』を書いて自然派の驍将となつたけれども、本来はロマンティシストなので、彼に翻訳『キイツの詩』一卷の有る事はこれを証するものである。……ただ、詩人としての花袋は、平凡陳腐なセンチメンタリスト以上に出ず、その歌ふところは主として片恋であつた⁽¹⁷⁾」、「田山花袋の『わが影』のセンチメンタリズムは、矢張り率直で純樸だが、技巧は国男よりも遥かに拙なくて胸中の千波万波を叙べたてただけで彼はそれがどんな結果として読者に反響するかを自ら知らない人であつた。『あら波』がこれを証する。たとへば、孤寂を孤寂と云ひ切つて孤寂が表はせると考へてみたが如くである。『影』が之を証する。しかし、彼の感傷は彼の芸術の生命である。その素樸な美は自然物の如くに人を共鳴させる。け

(16) 日夏耽之助『改訂増補 明治大正詩史』前掲書 226～228ページ。

(17) 矢野峰人「創始期の新体詩—『新体詩抄』より『抒情詩』まで—」前掲書 390ページ。

れども彼の作詩には遂にそれが出ずその美は後年に至つて散文にかへつて出た⁽¹⁸⁾」などと評されている。詩人としては平凡であるとみなされているのである。

(4) 太田玉茗

太田玉茗は、「花ふゝき」という、序と「帰らぬ父」「生と死」「闇の小川」「我星」「墳墓」「妻とふ鹿」「うたゝね」「初夢」「某夫人へ」「涙」「朧月夜」「文反古」「明治二十七年十一月弟正雄の柩を送りて」「同じく二十九年十月兄岩雄を失ひければ」「稚きものよ」「けふより姉」「蝸牛」「汽車の窓」「替嬢」「宇之が舟」「除夜の児」「我もむかしは」「年の暮」「坊や」「あさがほ」「めをと鳥」「老婆と雛祭」「尼法師」の28編の詩を寄せている。

この玉茗の詩は、「太田玉茗（……）の詩に著しい特色となつてゐるものは、『死』と『幼児』とを歌つたものが多い事である。それは、『花ふゝき』に収められてゐる詩の題に、『明治二十七年十一月弟正雄の柩を送りて』とか、『同じく二十九年十月兄岩男を失ひければ』とあるのを見てもわかるやうに、二三年の間に相次いで兄弟を失つた事、また、それにはまだいとけない遺児も有つた事と思はれるが、さうした身辺の事情が、必然的にこのやうなテーマを撰ばせたためであろう。さらぬだに、彼は身が僧籍に在つたため、……彼の詩材が其の方向に傾いた一つの原因とも見られよう」、「彼も、時に『替嬢』の如き特殊な題材を扱つて見たり、或は恋愛詩をも書いてゐるが、その歌ひぶりは、真情の吐露、実感の直叙とも評すべく、端的に人の胸を打つものを有つてゐる。また彼の詩に、『汽車の窓』のやうに、いちはやく汽車を取り入れるもののある事は、この時代の作としては珍とするに足るであろう⁽¹⁹⁾」、「玉茗の詩美は、『朧月夜』に恋人に対して心静かに恋情を抒べる可憐な野性の美に富む、静かなしかし何となくもの足りない恩情の叙述にあ

(18) 日夏耽之助『改訂増補 明治大正詩史』前掲書 228ページ。

るが、あらはされた詩形美がいかににもかすかで力がないのでつひに個性ある詩情の樹立は出来ずに終つた。『帰らぬ父』は、英湖畔詩人の幼年詩に感化を享けたと覺しい少女の天真を謳つた佳作ではあるが、詩の心に於てウヅウヅとは天淵の差がある。英詩人の幼年思慕はその靈魂先在説に基くのである。彼がハイネ訳は卓れた詩であつた⁽²⁰⁾と評されているのである。

(5) 矢崎嵯峨之舎

矢崎嵯峨之舎が寄せた「いつ真て草」は、序と「山蔭の翁」「厭ふ浮世」「白髭翁」「荒野の曙」「おさなご」「かたみ」「述懐」「露を哀む」「もの思ひ」の9編からなる。

この矢崎嵯峨之舎の詩は、「詩は彼にとり、最初から余技余業に過ぎず、『いつ真て草』に収められている九篇の作も、内容的には取り立てて言ふべきものが無い。然し、詩形は、比較的自由で、七五調を主軸としてはゐるけれども、時に七七を交えたり、……恰も後の自由詩の、或は律格研究者の、無自覚的先駆者たるかの概があるのは、面白い⁽²¹⁾」、「嵯峨之屋も、玉茗や湖処子と共に古顔の一人であつたが、激情もなく想像力も貧しい上に真の技巧に会得しえなかつたから、彼の個性が變つた味のあるものであつたに係らず、つひにその個性を赤裸々に詩の上に現はされずに終つた⁽²²⁾」、と記されている。

(6) 宮崎湖処子

本詩集の編者宮崎八百吉は、「水のおとずれ」という詩集を寄せている。序

(19) 矢野峰人「創始期の新体詩—『新体詩抄』より『抒情詩』まで—」前掲書 391ページ。

(20) 日夏眈之助『改訂増補 明治大正詩史』前掲書 228ページ。

(21) 矢野峰人「創始期の新体詩—『新体詩抄』より『抒情詩』まで—」前掲書 391ページ。

(22) 日夏眈之助『改訂増補 明治大正詩史』前掲書 228～229ページ。

と「失題」「賛美歌」「あるとき」「小川」「里の子」「水声」「忘れ水」「摘草」「春のゆうべ」「菖蒲」「仲秋」「葦」「薄」「枯野」「浮世美人」「警矯飾」「厭戦争」「雲雀」「牽牛花」「雪中」「おそよ」「疎屋」「釣翁」「君と吾」「わかるゝ際にのぞみては」「寂寞」からなる。

この宮崎湖処子の詩について、矢野峰人は、湖処子は日本語で書かれた最初のワーズワース伝の著者で、早くからの陶淵明とこのワーズワースに傾倒したが、彼の詩は、「要するに、湖処子の詩は、素朴・清純の点に於て、当時としては新しい調べを奏でたものといふべく、時に稚拙の域を出ない事のあるもやむを得ない次第である⁽²³⁾」と述べ、日夏耽之助は、『『水の音づれ』の湖処子は、『帰省』に出た詩の書かれた頃こそ若い感情が艶と丸味を持つて淑やかに語られた真実性によつて多くの人を魅惑する力があつたが、『国民之友』に多作するに至つた彼、即ちこの集に見える彼は、既にその独特の悠々たる寂味のある天然の調子をもつた表現も旧套に泥み、詩感は屢々昔の型を繰返して再説するだけで、新しき境地を拓いてゆく底力は全くなかつた。とはいふものの、これを此集の儕輩の詩人に比べれば、尚残るその哀婉の情は残んの薇薔のやうな香をとどめて此集の値を高めてある。しら雲を千重へだてゝ、／黒かみのながき月日を、／霊の緒もたえばたえよと、／一すぢにおもひしこゝろ、(『君と吾』一節)といふ古句を使つて、よく自らを歌ふその細かな、なよびやかな感情、『おそよ』によせた信仰、『葦』の單純な象徴美、これ等は彼の純粹な詩人肌が自ら生んだ賜物であつた。彼の詩を花袋の作である『雨の夜』の……と比べると、遙かに一家の詩風の所有者たるを失はぬ人であつたことが判然するし、又、玉茗の『墳墓』に於ける想像の拙劣な表現に較べて彼の自然な想像の描写の巧みが判然とする⁽²⁴⁾と評している。

(23) 矢野峰人「創始期の新体詩—『新体詩抄』より『抒情詩』まで—」前掲書 388～389ページ。

(24) 日夏耽之助『改訂増補 明治大正詩史』前掲書 229～230ページ。

4 『抒情詩』の解釈と鑑賞

小川和佑は、「その詩風を代表するような詩としてこの4編を選」ぶとして、国木田独歩の「山林に自由存す」、松岡国男の「野末の雲」、田山花袋の「琴の音」、宮崎湖処子の「里の子」を選び、解釈と鑑賞を行なっている。⁽²⁵⁾

山林に自由存す 国木田独歩

山林に自由存す／われこの句を吟じて血のわくを覚ゆ
嗚呼山林に自由存す／いかなればわれ山林をみすてし

あくかれて虚栄の途にのぼりしより／十年の月日塵のうちに過ぎぬ
ふりさけ見れば自由の里は／すでに雲山千里の外にある心地す

皆を決して天外を望めば／をちかたの高峰の雪の朝日影
嗚呼山林に自由存す／われ此句を吟じて血のわくを覚ゆ

なつかしきわが故郷は何処ぞや／彼処にわれは山林の児なりき
願みれば千里江山／自由の郷は雲底に没せんとす

野末の雲 松岡国男

野末のくもよ、しばらくは／日影にかゝれ、思ふ子が／
はかにたむけて我が帰る／たゞもとのなでしこの／
あまりはかなく枯れなむに、

(25) 以下、小川和佑「抒情詩」『日本文芸鑑賞辞典』第2巻 前掲書 225～226ページ。

琴の音 田山花袋

尾花が中をかきわけて／ひろき野原をひとり越え／
 橋なき川をわたりつゝ／いつも行くなりなつかしき／
 君が小琴をきかんとて／

けふも野原を過ぎつくし／月かげしろきさと川の／
 ながれを今ぞわたる時／早うれしくもきこゆなり／
 君がかなづる琴のおと

里の子 宮崎湖処子

里の小川を来て見れば、／小魚とるとて子どもらが、
 きのふもけふもくるゝまで、／水をぞすくふうちむれて。

いさら小川のさらさらと、／たえず月日はながるゝを。
 里の子どもはいつまでか、／とまらぬ水をすくふらむ。

小川和佑はこれらの4編の詩にもとづいて、「これらの詩編を読んでまず気づくことは、明治二十年代に流行した叙事詩、あるいは物語詩と呼んでよい長篇詩から、短い心の秘密を歌う詩に質的な変化が起こったことが分かります。『抒情詩』収録の詩編はなによりも恋愛詩と田園郷愁詩とを意図的に集めて、詩集一冊が明治三十年代の新しい新体詩に向かって時代を切り開いて行こうという姿勢を見せていました」と記し、『抒情詩』の主題は恋愛と故郷の自然である、としている。そして、この恋愛と自然という主題についておおよそつぎのように解説していく。

「恋愛」は明治の青年たちにとって、なによりも新しい思想であり、文学の近代化に緊急、かつ最も重要な主題であった。宮崎湖処子が、この新しい思想である恋愛を重視し、恋愛歌を中心に一冊の詩集を編集したことは、当

時の青年たちの時代を生きる思想の集約になった。

もう一つの主題は故郷の自然である。彼等は地方出身者であるが、人生の成功を夢見て上京してきたこの首都東京は自然と切り放された人工の空間であり、生産と生活という人間存在の条件を無視し、人間性をも否定しかねない空間ではないかと、彼らおよびその背後にいる東京をめざす青年たちは思っていた。彼らは、西洋化する都市空間に生きながら、ここは人間本来の生きる空間ではないと考え、その対極にあるかつて成育した自然と人間、生産と生活が完全に調和していたと考えている地方の田園空間こそ人間の生きる場所だと考えていた。国木田独歩の「山林に自由存す」が名詩として同時代の多くの青年たちに深い共感をもって愛誦された理由はこのような心情に支持されていたからである。富と成功を求めて激しい競争を繰り返す人間の生存状況は無視した人工の空間である都市に、彼らは本当の人間の生活はないと考えた。彼らは夢見る少年時代を生きた地方生活を取り囲んでいた自然こそ、人間の生きる空間であると牧歌的に空想したのである。こうした詩の主題に先鞭をつけたのが宮崎湖処子で、ここにあげた「里の子」もそうした夢みる少年時代の故郷での自然とともに生きた世界を甘く感傷的に歌いあげた詩である。「野末の」と「琴の音」はそういう牧歌的な故郷への郷愁と恋愛感情とが巧みに融合した恋愛詩である。どちらも甘くせつない詩であるが、ちょうど西洋の中世の騎士が愛する姫を思うようなプラトニックな愛を歌いあげている。

以上のように、小川和佑は、恋愛と郷愁を主題としているところにこの合同詩集の特徴があり、ここに同時代の青年たちの共感を得た所以である、というのである。その際にこれらの詩人たちが地方の出身者であることをことのほか重視しているのである。

そこで、これらの人々の出生地、そして上京の経緯を主としてその経歴を瞥見する。⁽²⁸⁾ 国木田独歩は、1871（明治4）年7月15日に下総国（千葉県）銚子に生まれた。父親の仕事の関係で山口県で成育。1887（明治20）年山口中

学校を退学，4月上京。翌年東京専門学校入学。松岡国男は，1875（明治8）年7月31日に兵庫県神東郡田原村（現神崎郡福崎町）に出生。1887（明治20）年三兄に同道上京。田山花袋は，1871（明治4）年12月13日栃木県館林（現在群馬県）に出生。1886（明治9）年上京して巡査となっていた父のもとへ一家上京。翌年父西南戦争で戦死。一家館林に引き揚げる。1881（明治14）年足利の薬種屋に丁稚となり，まもなく東京京橋伝馬町の書店の丁稚となる。翌年暇を出され帰郷。1886（明治19）年長兄の就職にしたがい一家上京。これ以後東京で暮す。太田玉若は，1871（明治4）年5月6日武蔵国埼玉郡忍（現行田市）に出生。12歳の年落髪，1886（明治19）年上京，曹洞宗大学林に学ぶ。以後東京居住。1897（明治30）年10月三重県に移住，1899（明治32）年埼玉県羽生の建福寺の住職となり，以後そこで暮す。矢崎嵯峨之舎は，1863（文久3）年1月12日江戸日本橋箱崎新堀の久世大和守中屋敷に下総関宿藩士の子として出生。1876（明治9）年9月外国語学校露語科入学，83（明治16）年10月卒業。10月統計院に就職，85年官制改革により統計院廃止，休職となる。86（明治19）年，同学の友長谷川辰之助（二葉亭四迷）に伴われ坪内雄藏を訪問，小説家となるを決意し，坪内家の書生となる。坪内より嵯峨の屋お室の号を与えられた。宮崎潮処子は，1864（元治1）9月20日，筑前国（福岡県）下座郡三奈木村（現甘木市三奈木）に生まれる。1884（明治17）年上京，東京専門学校政治科入学，86（明治19）年7月卒業。同年5月受洗。

このように，矢崎嵯峨之舎を除いては地方出身者であり，あるいは生活の糧を求めて，あるいは勉学のために年若くして上京してきた者たちである。青年であるがゆえの恋と，そして故郷への思いにはせつなるものがある。東京は大都市である。しかし，このときの東京は彼等にとって息の出来ない

(26) 以下，松村緑編「年譜」『明治文学全集 60 明治詩人集（一）』1952年 筑摩書房 406～409ページ。

ような人工都市であったであろうか。郷愁とは人工都市の対極にあるものとしてそれであったろうか。この点の検討が課題であり、さらに、この詩ではかにうたわれているものは何か、この点の検討を行なおう。

5 作品の分析

このように、小川和佑は、「愛と郷愁を歌った青春詩集」であるということ、国木田独歩「山林に自由存す」、松岡国男「野末の雲」、田山花袋「琴の音」、宮崎湖処子「里の子」をとりあげ解釈しつつ、明らかにしようとしている。

この愛と郷愁とをうたいあげたということについては同意するが、なお、それらに劣らぬ重要な要素をもつものと思われる。そのためにいくつかの作品をとりあげる（『日本現代詩大系第二巻』1950年 河出書房 収録の「抒情詩」による）。

国木田独歩

友なき里

今日一日も暮にけり／友なき里にさびしくも／
 入合告ぐ鐘のねに／今日一日も暮にけり
 明日もさびしく暮すらん／友なき里にさびしくも

森に入る

遠山雪をわれのぞみ／若き血しほぞわきにける
 自由にこがれわれはしも／深き森にぞ入りにける

あわれ乙女のこまねきて／恋しき君よと呼びければ
 わかき心のうきたちて／何時しか森をわれ出でぬ

森をば慕ふわれなれば／都のちまたに生ひたちし
乙女がこゝろあきたらで／恋を黄金に見かへしぬ

あはれはかなきわが恋よ／若きこゝろもくだかれて
わかき血しほも氷りはて／をぐらき森にわけ入りぬ

松岡国男

年へし故郷

たのしかりつるわが夢は／草生るはかとなりけり、／
昔に似たるふるさとに／しらぬをとめぞ歌ふなる、
さらば何しに帰りけん、／
をさなあそびの里河の／汀のいしにこしかけて／
世のわびしさを泣かむ為、

ある時

人まつ山のもゝちどり／ことしも群れて遊ぶなり、
めでつる君はなけれども／花は咲きけり、この春も、

あまりの昔の恋しさに／この山里に来て見れど
変らぬものは野山にて／我は一人になりけり、

都の塵

君が園生の花うばら、／
ちりて乱れていつとなく／みやこの塵にまじるなり、
、
都の市にたつちりを／向いぶせしと厭ひけん、
うれしき君が住むやども／みやこの中にあるものを、

君しみよこをよしといはゞ／我も山辺はわすれてん、
やまべに鳥はうたふとて／谷ゆく水は清しとて／
君さへなくばいかにせん、

花はしばしばうつろへど／あやは錦はかぎりなし、
鳥は来鳴かぬ折もあれど、／うたは聴くべし朝よひに、
うべこそ君がよしといへ、／都のはるは常盤にて、

されど我妹子、高どのゝ／窓を開きてをちかたの
たかねを見ずや、其峰の／青きが上にむらむらと
たつは白雲はるはると／
なびくは檜原、其かげに／人は住むなり安らかに、

あはれ君だに一ことも／山辺をよしとのたまはゞ
如何によからんいかばかり／うれしからまし、あはれ君、

田山花袋

昔の友

名をば成さんとふるさとを／ちかひて出でし竹馬の
むかしの友にわれ逢ひぬ／おもひもかけぬところにて

友はおのれにきみはいま／何をなしてかあたまふと
いとやさしげにたづぬれど／われは答えんすべぞなき

あはれと思へわれはしも／消ゆることなきかなしみと
たゆる時なきうれひより／外には何もあらぬ身ぞ

国木田独歩の「友なき里」は郷愁の郷里には友のいない寂しさをうたい、松岡国男の「年へし故郷」「ある時」の2編は、郷愁に駆られてたちもどった郷里には、愛する乙女がいなくなっているということにことづけた知る人のない寂しさをうたっている。いずれも郷里の変化を、故郷喪失を寂寥の念を込めてうたいあげている。

国木田独歩の「森に入る」松岡国男の「都の塵」は、都市と地方の対立・相克を愛を介在せしめつつ描いたものである。

花袋の「昔の友」は、志を立てて故郷を出たものの、まだ身を立てることのできない、彷徨・挫折、寂寥・孤独をうたっている。

これらを加えてみたこの詩集の特徴は、恋愛・失恋、郷愁・望郷、彷徨・挫折、寂寥・孤独をうたいあげた詩集といえることができる。

6 『抒情詩』の時代性

小川和祐は、この詩集を青年期特有の恋愛と、地方（＝田舎）出身者の人工都市東京との違和感、そして故郷への郷愁をメインとした「愛と郷愁をうたう」ものであるとした。東京が地方出身者に違和感をもたせるのは、東京が人工的要素が大きいからであることはいままでもないが、小川和祐はこのことをこの詩集全般を通ずる主題であるとした。たしかに、当時の東京は近代的な都市へと大きく変貌しつつあった。1917（大正6）年に書下しで刊行された田山花袋の『東京の三十年』にもこのことは描かれている。しかし、小川和祐は、この人工的都市要素をやや強調し過ぎていると思われる。

この田山花袋自身についてみると、この地方出身の花袋が東京での生活の場としたのは、都心での書店の小僧時代を除いては、牛込区界隈であり、そこは随所に自然が残るところであった。花袋の『東京の三十年』にはこの牛込界隈が都市とはいえないと受けとれる描写が多く挿入されている。その描写をみていこう（『田山花袋全集第十五巻』1974年 文泉堂 収録による）。

『東京の三十年』の「山の手の手空気」には、明治20年代の牛込界隈の描写がある。

柳町の裏には、竹藪などがあり、早稲田の方に行くと、梅林があったり、畑がつづいたりして、山の手は寂しかった。早稲田から鶴巻町へ出て来るところは、一面の茗荷畑で、早稲田の茗荷といえば野菜市場にも聞えていた。その茗荷畑の中に細く通じて野の雑木林の中に入って行く路をよく歩いた。「静かに入つて物を思つたり何かするに好いやうな林は、まだその頃はそこゝに残つてゐた。茱萸の実が赤く人知れず熟してゐたり、初茸が出たりするやうな松林もあつた。冬は裏の林に凧が来た。それに、その時分は一つしかなかつた山の手線の汽車の音が、夕暮に遠く野を掠めてきこえた」。(『東京の三十年』518～519ページ)

花袋は、1896(明治29)年2月に四谷内藤町から牛込喜久井町に引越した。花袋はその様子をつぎのように記している。

そこはある大名の下屋敷のあつた跡で、築山は丘に、池は田になっていた。屋敷の跡は広い原で、そこに一軒ぼつんとある家を花袋一家は借りた。「朝に夕にそのひろびろとした田と丘とに対して、尽きない空想に耽つた」。田を越した向こうの丘の上の眺望が非常に良かった。丘の向こうには、榛の並木が並びたち、彼方の路を通る車の音が静に秋の空に響いた。「私は一人で又は友達と一緒に、よくその丘の上に立つた。今ではもうさうした眺望台を私達は何処にも得ることは出来まいと思ふ。ひろいひろい地平線の上に漂つた雲、向うに連りわたつた目白台の翠微、下に江戸川が細く布を引いたやうに流れてゐるのが手に取るやうに見えた。秋の静かな日の夕ぐれなどは殊によかつた。それに、丘の上には一面に萱原がさらさらと鳴つた」。(『東京の三十年』519～520ページ)

牛込の山の手には明治の文壇の人々がかなり多く住んでいた。坪内逍遙は大久保に、尾崎紅葉は横寺町に、江見水蔭は北町に、後藤宙外は花袋の住む家と丘を一つ隔てた弁天町に、住んでいた。川上眉山は小石川の富坂から牛

込の北山伏町に移り住んだ。（『東京の三十年』521ページ）

志をたてて上京してきたこの青年たちにとっては、苦痛と煩悶と焦燥は、むしろこの志をたて得ないことにあるとあってよいであろう。花袋の「昔の友」なる詩1編はそれをよく示すであろう。

この田山花袋には初期の小説に『小詩人』という1893（明治26）年の作品がある。（『田山花袋全集 新輯別巻』1974年 文泉堂 収録 119～168ページ）

主人公は詩人として世に出ることを志している青年で、母と兄とともに生活している。所は牛込である。ある夏の日の夕方、彼は、倦果てたる著作の筆を措いて散歩に出た。さまよい歩くうちに、かつて住んでいた家があるあたりに来た。そこで、ある少女の姿をみる。「未だ乱れる島田髻の上より、白がすりの衣の裾迄月の光を帯びたる立姿はさながら月中天女の図髣髴たり」。それはかつて主人公一家が借家をした大家の坂田正幸の娘菊であった。彼はかつてから見知っていたこの娘につよく引かれた。この坂田家は地主で、財産に富み、主の正幸は内務省に勤務、女隠居は親切であるという。

彼はみごとに美しくなったこの菊に恋こがれるようになってしまった。ところがこの菊に縁談が持ちあがる。相手は今年の春仙台の高等中学校の教頭に任ぜられた人物である。菊は17才、もう嫁入りの年頃であり、「まして婿といふは文学士、高等中学の教頭」である。主人公は心穏やかではないが、まだ幼く、あと1、2年は手離したくないという菊の親の考えからこの話は立消えとなって、主人公は安堵する。

ところが、この主人公の従兄弟なる人物がいて、彼は大学を出て郷里に帰省したが、このたび内務省に勤務することとなる。その一家は上京し、坂田家所有の裏の二階家を借り住まうこととなった。この従兄弟は、9月1日より内務省に出勤する。彼には人力車での送り迎えがある。主人公は、「朝夕の送り迎への車夫の声きく度に、わが心の苦痛は言ふに堪へざるばかり」である。従兄弟にひきかえ「わが兄の早往晩帰、身神共にほとほと疲れ果つるにくらべては、我ながら激したる涙に幾度かわが袖をぬらしたりけむ」。そし

て「我れは一刻も早くかくれたる名を世に挙げて、人の知らざる技倆を世に示さむことをつくつくも願へるなり。されどわが傑作はいかにしつる、その書きはじめたる原稿はいかに。これを思へば、心神錯乱して悲しきことのみ胸に浮か」ぶのである。

主人公はその年の夏から秋にかけて信州で過ごすことになる。親しい友人からこの夏こそ来たまへという誘いがあったからである。菊のことが気がかりで心ゆれながらも気分を和らげ、また、いまとりかかっている作を完成することができるのではないかとの思いから、信州へと旅発ったのである。信州の自然に接し、心洗われながらも、かの坂田の娘菊への想いは断ちがたく、9月を過ぎる頃、急ぎ東京へ帰った。前触れのない帰宅に母や兄は喜び、久しぶりの一家団楽を楽しむ。しかし彼が、そこで聞いたのは従兄弟が嫁を貰うという話であった。相手は誰かと問うと、それはなんと坂田の娘菊であるという。衝撃を受けた主人公の耳に、母や叔父たちの話が聞える。それは「内務省、同じ役所、媒酌なぞいへる言葉」である。

主人公は、「信州にさへ行かずは、このやうな苦痛にも逢はざりしものを」と悔しがるが、しかし、「さりとて我には地位もなし、財産もなし、少女をわが妻にせむなどゝは始より待設けざることならずやと思」い返しながらも悩まずにはいられないのである。

ここに描かれているのは、作家というまともな仕事をもたない、そしてろくな作品も書いていない男の焦燥である。それは内務省の官僚を対極に置くコンプレックスとして描かれている。

この小説について、花袋は『東京の三十年』につぎのように記している。

中町の道は納戸町に住んでいる時分によく通った。中でも中町が一番印象が深かった。大きい邸があり、裁込がきれいで、若い美しい娘が多かった。そういう娘たちに話のできる若い軍人などが羨ましかった。「それに比べて、貧しい一文学書生のいかに惨めであつたことよ。『小説なんか書いて、ぐづぐづしてゐる奴は、どうせ碌なものになれやしない。』私の周囲のもので

さへ、さうした冷めたい批評の目と言葉とを私に浴せかけた」。大家の主は大蔵省の属官を勤め、毎年見事に菊を育てた。その娘は菊子といい、彼女の姿は長い長い間、常に頭にあった。『小詩人』の菊のモデルである。（『東京の三十年』515～517ページ）

花袋の一家はこの納戸町から甲良町の親類の借家に移った。年表によると1902（明治35）年、花袋32才の年である。この頃のことを花袋は『東京の三十年』につぎのように記している。

「その年の春ほど人生が私につらかつたことはない」。それは、家計困難のために折角行きだした日本法律学校を退学せねばならなかったことなどがあった。「その甲良町の家は二間しかなかつた。長火鉢の置いてある方が六疊、座敷が八疊。その座敷の裏の所に面した窓のところに、私は机を置いて、精々と筆を動かしたり、限りなく甘い空想に耽つたりした。机を押つけて置いたところが壁で、右の障子に一枚硝子が大きく入つてゐたが、その硝子を透しては何もない狭い汚い小さな庭が見えた。そこで私はよく涙を流した。思ひのまゝにならぬ涙、少女にあこがるゝ涙、嫂の不意の死に対する涙、社会に出て逸早く成功した人達を羨む涙、家計の貧しさを悲しむ涙、焦せつても自己の力の足りないのを悲しむ涙……。それに『いつまで遊んでゐるんだか、宅の録も……。何処へでも出て五円でも十円でも取つて呉れよば好いのに……。』母親の愚痴も散々其処で聞いた」。（『東京の三十年』481～482ページ）

ここには、志をたてるながら確固たるものを掴み得ずにいる者の心境が記されている。

さらに、田山花袋は、『東京の三十年』につぎのようなことを書いている。

「『大日本地誌』の編輯の手伝ひを私は明治三十六年から始めた」。山崎直方、佐藤伝蔵が主任で、花袋のほかに、若い文学士、理学士が手伝う。編輯室は〇家の邸宅の一室で、光線の暗い陰気な一間で、いつもぼつねんとしていた。退屈すると草履をつつかけて、その邸の静な庭などを歩いた。「何うか

すると、邸の主人が私一人ある処へやつてきた。『小説家なんて駄目だよ、君。紅葉の遺族なんか見たまへ。惨めなもんじやないか。それよりも、博士方の地理の講義でもきいて、真面目に勉強する方が好いよ。』主人はこんなことを言つた。それほど博士、学士が尊敬されて、そして我々文学書生は卑められてゐたのであつた。『え、そうですねー』使はれている身の悲しさに、又はそれほどすぐれた作品を公にしてゐない身の情けなきに、私はこう言つて主人の言葉に調子を合せた。しかし、腹のなかでは、文学の爲めに、『今に見ろ』と絶叫せずには居られなかつた。(『東京の三十年』634～635ページ)

この出版社は博文館であり、主人とは大橋新太郎である。ここには、文人を一人前とは見ない実業家の姿と、文人の屈折した心情が示されている。明治30年代は、資本主義社会が成立し、ブルジョアジーと官僚が確立した。ここには、そのようなもとでの文士の置かれた状況と、ことに志不首尾の苦悶が記されているといえよう。

愛と郷愁とともに彷徨・挫折をうたつたこの詩集は、己のそれをここに重ねる青年、ことに地方出身者の共感を得たと想像するに難くない。

遠く離れば故郷は懐かしい。ことに志をたてて上京しながら、富も名声も、そしてなによりも生活の手立てを得ることのできないものにとってはそうであろう。しかし、東京に違和感を覚えるとしても、故郷も昔のままにとどまっていないことも先にあげた詩によつてもわかることである。夢やぶれて帰ろうと思う故郷、それは郷愁の故郷ではあるが、同時に帰ることができない所でもある。帰つたとしても故郷喪失の悲しみを味わうのみである。故郷を出たものはいわば異境人となる。この彷徨・挫折、寂寥・孤独、そして郷土喪失がこの詩集を貫く重要な主題となっているであろう。

なお、東京は大都市であり、明治30年頃には近代都市への発展をとげつゝあつたが、なお東京を人工都市といい得るのは後年であり、その時期にこそ地方出身の人々は人工都市東京との違和感と郷愁の念をより強くもつにいた

るのである。国木田独歩の「山林に自由存す」は後年にこそいっそう人口に膾炙していったであろう。

(1994年5月31日)